
月神の祝祭～月神の娘と夜の王子～（改訂版）

悠月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

月神の祝祭〜月神の娘と夜の王子〜（改訂版）

【Nコード】

N2800T

【作者名】

悠月

【あらすじ】

セイラは月の女神の名を冠する娘。ある日、都から使者が来て隣国の王子に嫁ぐことが決まったという。その存在さえ知られていない王子とは……

（以前投稿したものの改訂版です）

はじまりの物語

月の女神が言いました。

「そなたの色のなんと美しいことか」

月の女神は漆黒に身を浸すとゆつくりと目を閉じました。

「全ての色を秘めながらどの色にも侵されぬ」

月の女神の金の髪が彼女包み、闇を淡く照らし出しました。

「優しい闇は人々の眠りを守る」

空一面に輝く星々が子守唄を歌い始めます。

鳥は大樹の陰で羽を休め、幼子は母の胸に抱かれ夢の中。

「それでも怖ろしいというのなら私が路を照らしましょう」

月の女神は暗闇に手を伸ばすと、闇をゆるりと抱きしめました。

「宵闇を二人で守りましょう」

こうして月の女神リースと夜の神ジンは夫婦となったのです。

スタニア国神話より

工

序章

アリオスの冬は早い。

短い夏が終わることを告げるためにローラ山脈から一陣の風が吹き降り大地を荒らすと、すぐに寒気が忍び寄り木々が慌しく支度を済ませ冬が来る。

一年の半分ほどを雪と共に過ごす人々はすっかり雪と慣れ親しんできたが、その年の雪は殊更早かった。

まだ完全に刈入れの終わらない九つの月には、比較的温暖な気候であるタナトスでも、ちらほらと雪が降り始めた。

アリオスとタハルを繋ぐローラ山脈の中を貫くように走るノースの道では、氷床が完全に溶ける間もなく再び凍りついた。

いつもならばタハルの砂漠から吹き付ける風が小さな洞穴の中を彷徨って、赦しを請う亡者の嘆きの如く悲しげな音を立てていたが、今年はまるで違う。

彷徨う場所を失った風は一直線に走る。

ひよおおお

ひよおお

それはまるで怖ろしい何者かが上げる歓喜の声のようだった。

その不気味な声を聞いた者たちは、きつと良くないことが起こる前触れだと身を寄せた。

山脈の麓辺りは常に少数民族同士の小競り合いで騒がしかったが、この年ばかりは災厄が降りかかることを恐れ互いに己の領地に引きこもった。

一方で、都では早い雪は天からの寿ぎだと沸いていた。

王妃であるサンディアが懐妊したという知らせが届いて早十月。

昨夜から城では煌々と松明が焚かれて慌しい。

サンディアが産気づいたのだ。

戦王と称される強いロード王を掲げてアリオスは安定している。

昨年には側室であるシェラが王子を産み、今度は王妃だ。アリオスの行く末は安泰だと誰もが胸を撫で下ろしていた。

城の中は熱気に満ちていた。

新たな命が生れ落ちるまで己の運命は分からない。

王子ならば先に生まれたルーファ王子とどちらに付いた方が身の為か。

王女ならば早々に己の息のかかった婚姻相手を見つけなければ。期待と不安が入り混じる広間はまるで祭りの前夜のような。入りきれない祝いの品は庭にまで溢れていた。

王も気が気ではない。

一度、わが子を得る経験をしているがまったく頼りにはならなかった。

ルーファ王子が誕生した時は、朝焼けのすばらしい日だった。

安産で、やきもきする間もなく王子はロードの腕の中にいた。

サンディアの場合、彼女が陣痛を訴え侍医が駆けつけてすでに十数時間が経っている。

一秒一秒が長い。

暗かった空も明らみ始めたが、大きな雪雲に阻まれて常よりどんなよりと重い色をしている。

いかに王と言えどもお産中の部屋に入るとは赦されない。

ロードは檻に閉じ込められた野生の獣のように彼らの世界を隔てる扉の前を恨めしげに円を描きながら巡った。

ああ、もどかしいと眉間に刻まれた皺が雄弁に語る。

「落ち着いたらいかですか？」

最高齢の五元帥であるハマナ・ローランドは笑みを湛えながら口
ードを諭したが、あまり効果があったとは言えない。

しばしの間、おとなしく椅子に座っているのだが、落ち着かない
とばかりに再びうつろうし始める。

ハマナにはよく分かっていた。

今まで幾人もの誕生の場面に関わってきたが、お産の場面で浮き
足立った男どもは何もかも心得た婦人方に到底及ばぬものだ。
せめて迷惑をかけないようにじっとしているのがいい。

それにしても戦王と恐れられ、単騎でも敵を蹴散らしに駆けて行
く怖いもの知らずを慌てふためかせるものが、まだこの世に生れ落
ちていない子どもだなんて愉快な話ではないか。

これで、側室を得てからぎくしゃくし始めた二人の関係も穏やか
なになるだろう。

さあ、祝福は間もなくだ。

程なくして鉄壁の防御を誇っていた扉が開いた。

「お生まれになりました。王子です」

侍女は喜ぶべき言葉を青ざめた声で告げた。

扉に縋るようにして立つ彼女の頬もまた死人のように色が無い。

倒れてしまわないほうが不思議なほどだ。

その様に、さしものハマナも声を失ってしまった。

まさか死産か。いや、彼女は生まれたと言った。それならば母体
が危険なのか。

ハマナの横を風が走った。咄嗟に伸ばした腕も間に合わない。
突き飛ばされた侍女は廊下へと蹲った。震える声が赦しを請う。

その向こうに銀獅子の煌きだけが見えた。

ロードは百戦錬磨と謳われた戦王。

真っ先に戦場を駆ける足がぴたりと止まった。翠玉の美しさを持ちながら猛禽類のように鋭い瞳が開かれた。

一点を凝視したまま瞬きさえしない。

否、出来ないのだ。

視線の先にはサンディアがいた。産後の血で下半身を紅く染め、なおも溢れる赤は床に不吉な染みを描き出す。

結われていない髪が体に沿ってぞろりと流れる。

美しい豊かな赤毛は窓から差し込む鈍い光を受け、古血のように変色した。

虚空を彷徨うように焦点の合っていないかった視線がロードを捕らえると、サンディアは赤子を胸に抱き寄せ嗤った。

部屋の隅にいた侍医たちが声にならない悲鳴を上げ、災厄から逃れようと身を縮める。

「ねえ、可愛いでしょう？ 貴方の子よ」

幼子は産声を上げることも無く、紫色の瞳で父親を見つけた。

「きれいな白色」

幼子は白かった。

微かに映える髪の毛も本来ならば血の通った色しているはずの柔肌も皇かな白だった。

それがまがい物めいていてロードは息をのんだ。

幼子は瞬き一つしなかった。

部屋の中を覗きこんだ人々もひゅつと喉を鳴らして沈黙した。人々の恐怖を煽るようにサンディアが嗤う。

「さぞやあの女の血が映えることでしょう。あの泥棒猫の」

嗤い続ける女にもはや王妃の威厳はなかった。

狂ったように嗤い続ける母親の腕の中で幼子は瞳の色を赤く変えた。

「ねえ、アリオス国王陛下。うふふつ。あはははは。可愛い可愛い私の子ども。うふふ。可哀想な私の息子。お前の名前はジルフォードよ」

アリオス国王妃サンディアはその日、一人の男の子を生んだ。側室であるシェラがルーファ王子を産んで丁度一年後のことだった。

王子の名前はジルフォード。

それはアリオスに伝わる姿無き魔物の名前であった。

第一章：はじまりに続く道

エスタニアは秋の女神の恩恵を受けて豊穣の季節を迎えていた。最も早く季節の巡るルンドイで作物の刈入れに精を出し、実りの絨毯が半分に減った頃、ジニスにも秋めいた風が吹いてきて今年の夏の暑さを思いほつと息をついていた。

アデラスト山の麓にあるジニスは鉱山の街だ。

鉱脈師の一族が興した人口数百人の小さな街ではあるが、ここで採れる玉の質と加工技術の高さから有名な街だった。

これから涼しくなるにつれジニスの主な仕事は玉の加工から採掘へと移って行く。

今は丁度中休みの時期で、専ら品物を買付けにやってきた商人たちとの交渉に精を出している。

騒がしさの消えた加工場にちらりと影が走る。

部外者が入り込めばすぐさまたたき出されるジニスで最も秘密をもった場所ではあるがジニスの子どもたちには許された。

普段なら長が座る椅子を引っ張りだして座っているのは亜麻色の髪を揺らした少女だ。

漆黒の瞳を爛々と輝かせ目の前に広がった色彩の渦にうつとりと魅入っている。その前で箱を掲げ持っている少年はへへへと笑うと胸を反らした。

「おいらの玉はどれなのか当ててみな」

皇かな布を張った箱の中には色も細工の方法もさまざまな玉がちらばめられている。

とびきり美しい夜空のようだ。爪の先ほどの小さな玉も都の高級装飾店の看板商品になってもおかしくないほどの仕上がり具合だ。

「これとこれ。それにサイの細工も」

少女は赤、黄、それに乳白色をした玉を手にとってにっと笑った。

「おめでとう。オーリイ。見習いを卒業したんだね」

オーリイと呼ばれた少年は頬を染めもう一度笑った。

ジニスでサイと呼ばれる此処でしか取れない乳白色の玉の加工が許されるということは、やっと半人前になったと認められた証なのだ。

「こつちとその青いのはダンの作だね」

殊更削りがまるやかな二組は鉱山の長であるダンの手によるものだ。

どれほどたくさんの玉に紛れさせても一目で分かってしまう。

「いつか絶対追いついて、追いついてやるんだ」

目指す先はあまりに遠いけれど、オーリイの瞳は真剣そのものだ。いつかジニス随一の職人へとなってみせる。その強い意志を秘めた瞳はどの玉より輝いている。

「オーリイならきつと出来るよ」

セイラの言葉に気を良くしたオーリイはふふんと胸を張る。

胸を反らしていたのはほんの数秒のことで、オーリイの顔には急に自信なげな表情が浮ぶ。

「なあセイ。もしもおいらが最高の加工屋になつたらさ……」

「おい！ セイいるか」

オーリイの言葉に被さるように、春先に天を割る雷鳴のような声が届いた。

掠れ気味だったオーリイの声なんぞそよ風に等しい。

声の主は先ほどまで話題に上っていた長であるダンのものだ。

爪の先ほどの小さな玉に緻密な細工を施すとは思えないほど筋肉隆々の大男で、固い髭に覆われた顔のせいで大熊と呼ばれることもある。

ダンが勢いよく扉を開けると建てつけの悪い家具がぐらりと揺れる。耳を塞ぐ二人の下へ足音も高く近づいてくるとオーリイの手元の箱へと視線が移った。

にやりと笑って一言。

「まだまだだな」

「わっわかつてらあ！ 今に見てろよ。すぐにあんたなんて追い越してやる！」

鼻息も荒く言い返した期待の星。

ダンは荒れた手のひらでオーリイの頭を掴むと無遠慮に撫で回した。

あれは少し痛い。微笑ましいと思いつつ痛みが甦り少女はぶると身を震わせた。

撫で回す腕を剥がそうとすればするほど相手も力を込める。

されるがまま耐えるのが一番早く開放される手段だ。

どうやらオーリイはその奥義を悟ってはいないようだ。

助け舟を出してやろう。

「ダン。何か私に用があつたの？」

本来の目的を思い出したダンは撫でくりまわすことは止めたが、がしりと掴んだ力を緩めてはいない。

微かに漏れた「いてえ」というオーリーの泣き言は聞こえていないようだ。

「おうさ。おめえの所に変なのが出来ているからさ。何かとおもつてな」

「変なの？」

ジニスには変なのは事欠かない。

もちろん高価な玉を狙つて襲いに来る賊たちもいるが、これはジニスに男衆たちに任せていれば問題ない。

中には齒に埋め込むための玉を注文しにきた客や、玉で靴を作ってくれたなんてやつてくる変わり者もいる。

前者は全齒に違う玉をはめ込んでご満悦で帰っていったし、後者は重すぎて歩くことを断念した。

こつした珍客は多々いるのだが、鉋脈師でも加工師でもない少女の下へ直接やつてくることは無い。

「でっけえ馬車だ」

「ユリザねえさまが来たんじゃないの」

わざわざ馬車に乗って尋ねてくるような知り合いは姉ぐらいのものだ。

だがダンは首を横に振った。

「ありやあ、トゥーラの旗印じゃねえよ。自分の目で見てみるといい」

加工場はジニスの街の一番高い場所にあるため街の隅々まで見渡すことが出来る。

大通りでは行商人が小さな市を立て、夕飯の買い物をしに出てきた奥さん方がちらほらと見える。

広場では子どもたちがはしゃぎまわっており、加工場に人影を見つけるとひとしきり手を振った。

それに応えつつ東の端へと視線をむければ鉾山の街には似合わない豪華な建物があった。

塀を備えたその屋敷の前にはダンの行ったとおり大きな馬車が止まっていた。

彼らの掲げる旗は真紅で金の豎琴が描かれている。

それは芸術の神タトラの印。

そしてそのタトラはエスタニア国王リユーデリスクの旗印でもある。

屋敷の主の名はセイラ・リユーデリスク・リーズ＝エスタニア。

月の女神の名前を冠する8番目の王女。

母親の身分が低かったがために都から離れたジニスへと屋敷を与えられた不運の王女。

その王女を王直々の使者が尋ねてくるのは、それほどおかしいことではない。

その訪問が王女が生まれて初めてだという点さえ除けばだが。

「そつえば、誰か都から来るんだっけ？」

第一章：はじまりに続く道2

屋敷の中はかつて無いほど忙しかった。

なにしろ都から使者を向かいいれることなど初めてのことなのだ。今まで訪ねてきたお偉いさんと言えば、隣接する村や町の長ぐらい。皆気心も知れているので、近所のケーナおばさんの手製の菓子があればどこまでも話は膨らんだが、今回はそうも行かない。

まだ用意しているところに予定より随分早く着いた使者一向に慌てずにいられようか。な

んとか整った部屋に通してお茶を出したところまでは良かったのだが、問題が一つ。

王女が行方不明なのだ。

ああ、もうセイラ様だったらどこに行つたのよ！ お昼過ぎには帰ってくるって行つたのにい！

悪態をつきながら曲線のきつい黒髪を振り乱して走り回っていた少女はセイラ付きの侍女であるハナだ。

小回りの聞く体で誰よりもすばやく動く彼女は重宝され朝からずっと働きづめだ。

お茶と茶菓子であとどれだけ使者を引き止めて置けるだろう。

さほど長い時間では無さそうだ。

セイラの居場所はいまだい予想が付いた。一か八か迎えに行こうかと思つたとき背後から声がかかった。

「ハナ。こちらへ」

先輩侍女の腕に抱えられたドレスと厚いベールが視界に入り、こ

の先の事態を悟ったハナは深くため息を吐いた。

セイラ様のばかあ

「まったくいつまで待たせるつもりだ」

国王からの手紙を運ぶ使者として選ばれた男は、苛立たしげに足を踏み鳴らした。

お茶はもう二杯もおかわりしたし、用意された菓子も食べつくした。

都のものには到底及ばないが中々味はよかった。

それにしても遅い。

さつさと用事を済ませて埃っぽい田舎からは去ってしまいたかった。

ここにいるのは客を楽しませることも喜ばせることもしない連中だ。

奥様にどうぞと装飾品ひとつ包んでこない。

それどころか華やかな馬車を見る目つきの剣呑なこと。

常識すらわきまえていない人々の中で過ごした王女などどんな人物か。

想像図は最悪だった。

だからこそ今度の件に名も忘れかけられた王女が選ばれたのだろうけれど。

カップを口に運び空だったことを思い出し、乱暴に戻した時、待ちに待った王女の訪れを告げるために扉が叩かれた。

「お待たせして申し訳ありません」

軽やかな愛らしい声の主は、ほんのりと淡いピンク色のスカートを持ち上げるとお辞儀をした。

ベールを被っているため顔の隅々まで見ることは出来なかったが霞のようなベールの向こうでふつくらとした唇が綻んだ。

「いやいや、これはセイラ王女。お目にかかれて光栄ですよ」

「私事です。ピラスト伯爵。何か不手際がなければよろしいのですけれど」

「いえ、そんなことは」

おや、これはとんだ予想外だ。

王女はてんで普通ではないか。腰を下ろす時の作法を申し分ない。はにかんだ様な笑みも深窓のお嬢様に引けを取らないだろう。おしゃべりな使者の眉毛が彼の心情をくまなく伝えてくれる。

「それでご用というのは？」

「おお、そうでありましたな。実はこれを国王陛下より預かってまいりました」

差し出されたのは染み一つ無い真白な封筒。

かざりつけの無い封筒には豎琴の形を押された封蝋がついていた。

国王直筆である証拠だ。

使者はそれを王女に押し付けるとほっと息を付いた。

王女は封筒を一瞥しただけで開けもしない。

使者は二三度咳をして促してみたが、一向に動かない王女に痺れを切らして先ほどより大きく咳払いをした。

これから重大発表をするのだと分からせるために。

「お喜びください。セイラ王女」

使者は瞳を潤ませてにつこりと微笑んだ。

「結婚が決まりましたぞ」

「は？」

ちよつと待つてくれ。

喉元まで出掛かった声は使者の声に阻まれる。

「こんな良縁はありません」

「私が結婚？」

「ええ、そうでございますとも」

声もでない王女を喜びのせいだと勝手に勘違いした使者は祝福の言葉を述べたが、王女の耳に届くはずも無い。

むしろ聞くまいとかぶりをふった。

これはどうもきな臭い話だ。

第8王女にいきなり舞い込んだ結婚の話。

王家にはまだ適齢期の王女がたくさんいるはずだ。

それなのに一番年下でしかも片田舎で忘れ去ろうとされていた王女に話を持ってくるだなんて、一体どういっつもりなのだろう。

「お相手はアリオス国のシルフォード王子ですよ。これでわが国の西の憂いはなくなりますな」

「……アリオス」

これで納得がいく。

アリオスはエスタニアの西にある軍事国家でここ数十年の間に急速に大きくなった国だ

野蛮だと陰口を叩いている国へは、大事な王女を嫁がせるわけにはいかないのだろう。

セイラの母は貴族の娘でも大商人の娘でもない。ただのジニスのルカだ。

その上彼女は他界しており誰も文句を言うものがない。恰好の貢物だ。

挨拶もそこそこにセイラ王女は部屋を後にした。

使者が少しの傷もつけまいと押しただいて持ってきた封筒は手のひらの中で無残に折れ曲がった。

自室に入ると乱暴にベールを剥ぎ取って、勢いよく長椅子に腰を下ろす。

本当ならば窮屈なドレスも脱ぎ去ってしまいたいが、二人がかりで背中を締め上げるタイプなので自力でどうにかすることは出来なかった。

「ハナの方がよっぽど王女様みたいだよ」

「ええ、そうでしょうとも。王女様は庭の木を伝って窓から出入りしたりしませんもの」

セイラ王女もといセイラ王女付きの侍女であるハナには、わざわざ振り返ってみなくとも後ろで繰り広げられている光景が容易に想像がついた。

無造作に束ねた亜麻色の髪を揺らしながら一人の少女が窓に足をかけている。意志の強そうな大きな瞳が楽しげに笑ってる。振り返れば、まさにその姿があった。

「もう！ お昼には帰ってきてくださいって言っていたのに」

「まだ、お昼だよ？」

正午を告げる鐘の音がしてから、まださほど時間も経っていない。天空の王者である太陽も中天からは退いたものの僅かに傾いているだけだ。

「……そうですわね。使者殿もしっかり時間を守って欲しいもので

すわ」

怒りに任せて髪をかきあげようとして、ようやく手元の手紙に気がついた。

「セイラ様。これを預かりましたわ」

「なんだ。開けてくれても良かったのに」

押し戴いて持つてこられた封筒はぞんざいに扱われ、タナトの印が押してある蠟封はパキリ割れ、床の上へと落ちたがセイラは気にした素振りも見せずに封筒の端を破いていく。

「そうはいきませんわよ。国王直筆の手紙ですもの」

「どうせハナにも見せるのだから、関係ないよ」

あっさりそう言うセイラにほんのり胸の奥が暖くなり、ハナは頬が緩むのを見られないようにと下を向いて封筒の残骸を拾った。そして、無造作に机の上に座るセイラにハナは衝撃的事実を教えるために口を開く。

「セイラ様、結婚なさるようですわ」

「そうみたい」

意味が分かっているのか疑うほどさりと流される返事に驚いてハナは声を荒げた。

ドレスに締め付けられていなかったらもっと大きな声が出たに違いない。

「結婚ですよ！　しかもアリオス王国の王子と！」

「そう書いてあるね」

ほらとセイラは手紙をよこした。

書かれた文字は優雅で、けれど内容は事務的にたんと結婚が決まったことを告げていた。

詳しいことは何一つ書かれていないが、なぜ婚約に至ったかは手にとるように明らかだった。

アリオス国王は婚姻による和睦を申し入れてきたらしい。

大陸の華と呼ばれササン大陸一の大国であるエスタニアだが、最近は厄介ごとを少なからず抱えていた。

大陸の東、シャオンの海に浮ぶ島国シンバ皇国が大陸に手を伸ばそうと海岸を荒らし、南の海の十三列国の小競り合いがよくエスタニアまで飛び火する。

またローラ山脈を挟み東にあるジキルドとあまり仲の良くない現在、西の守りは堅いほうが良いと判断したのであるう。

その申し入れに快く応じたらしい。

「だからって何故セイラ様に」

おそらく、第4、5王女が候補にあがったが、あんな成り上がり国嫌だと突っぱねたのであろう。

どちらも正妃の娘だ。

野蛮だと言われる軍事国家に嫁がせるには抵抗があったのかもしれない。

それに比べ、セイラの母の身分は低い上、すでにこの世にはない誰も文句を言うものなどいない。

何故と問いながらも、セイラにこの話が届いた経緯が容易に想像できて、ハナは頬を膨らませる。

「まあ、いいんじゃない」

セイラは膨らんだ頬を指で突き、空気を抜けさせた。

「どこですか!」

あっけらかんというセイラにハナはかみついた。

「アリオス国がどんなところが興味もあるし。あっちは雪も降るらしいね。楽しみだね」

「セイラ様」

脱力してハナは座り込んだ。

どうしてこの人はいつもこうなのだろう。

どんなことでもさりと受け止めてしまう。被害をこうむるのは回りにいるものなのだが、本人はいつでも楽しそうだ。

確かに嫌だと泣き叫ばれても、無力な少女に国王の決定を覆す事など出来ないのだから受け入れる他はないのだけれど。

「私もお供しますからね」

王女であろうとも覆せない事はハナもよく知っている。使者も手紙もこれは決定事項だと言っているのだから。ハナは少々涙目になりながらもきっぱりと言いつつ放った。

これはハナの決定事項。何があっても覆す事のできない少女の誓いなのだ。

「当たり前。ハナも一緒に雪遊びしなきゃね」

一生を左右する話の中で嬉々として雪遊びの話をする少女に軽くため息が出る。

「……それにしてもジルフォード王子なんていましたかしら。ルーファ王子……今は国王ですわね。彼の話は聞いた事がありますけど、弟君のことなんて聞いた事ありませんわ」

アリオス国のルーファの名は近隣にも知れ渡っていた。

王子であったときはその優れた武勇で国を大きくするのに貢献し、国王となった今では武力でなりあがった国とも思えないほど柔軟に隣国とも渡り合い、治世も悪くないと聞く。

妹姫がいる事はおぼろげに聞いたことがあるのだが、はたして弟君など聞いたことが無い。

「向こうも第8王女のことなんて聞いた事ないんじゃないかな？」

憤慨する友人にセイラはにっこり笑った。

「なるようになるさ」

第一章：はじまりに続く道3

「なあ、本当なのかねえ」

「あれが結婚するだなんて……なあ」

「あの『色なし』が」

冬の気配が濃くなってきた風を避けようと外套の襟を立て家路を急いでいた男たちは大通りで立ち止まると、ふと前方を見据えた。夕暮れの空を背景に地面に突き刺さった剣のようなアリオス城が佇んでいる。

煌々と灯りが焚かれる部屋の一つに、あの魔物がいるのだろうか。現在、アリオスを騒がせている噂は国王の弟が結婚するというものだった。

相手は隣国のエスタニアの王女であるという。

政略結婚など珍しくもない。現国王、ルーフア王にもエスタニアの王女との婚約話があがったことがある。

皆が恐れているのは、あの魔物が婚約するということだ。

王妃が恨みをこめて産み落とした王子。

歴代の王族は皆、銀の髪と緑色の瞳を持ったという。

それを許されなかった忌み子。

『色なし』と呼ばれた王子のもとへ嫁ぐ娘への同情を禁じえなかった。

体がふるりと震えたのは北風の冷たさだけではないだろう。

話はそれっきりにして男たちは家路を急いだ。

熱いスープと女房と子どもたちの「おかえり」が妙に恋しかった。

噂話も届かない城の片隅。

膨大な蔵書を抱える書庫は今日もひっそりと佇んでいた。

地下一階地上3階を誇る書庫は今の時期、たったひとりのために存在していると言っても過言ではない。

一階から三階までは吹き抜けで、壁には隙間なく書架が並ぶ。

柱には賢人たちの姿が彫りこまれ、色ガラスをはめられた窓から差し込む光りによって生を受ける。

けれど今は日も暮れかかった時刻、賢人たちも薄闇に沈んでいた。

レリーフで飾られた入り口の扉に比べれば、あまりにも質素な扉が開くと中からランタンを掲げたローブ姿の男が現れた。

暖かなオレンジの色に照らされた顔は柔和で、目じりに入る皺がさらにその顔を穏やかに見せている。

天井の彩に見入った瞳は凪いだ湖の色だ。静かな誰も居ない空間。数多の物語も閉じられ眠りにつこうとしている。

それを全て愛しむように瞳を閉じて息を深く吸い込む。

どこか埃っぽい古い紙の匂い。

背後から香る甘い香り。

今日のものは自信作だ。あの青年は好んでくれるだろうか。

この挑戦をするようになって十五年の月日が流れた。

「ジン様。今日はよく冷えます。お茶を淹れましたから一休みしませんか」

優しげなよく通る声は書庫の管理人であるカナンのものだ。
しばらくすると上階から猫のようにしなやかに人が下りてきた。
足音一つしない。その人物は薄暗い書庫の中を灯り一つ持たずに
歩き、気密性が高いといっても冷える石造りの書庫の中で薄い衣一
つきているだけだ。

その人物の髪は暗闇に溶ける事ない、見事な白髪であつた。
しかし、老人というわけではない。彼はまだ19歳である。
ランタンの光りを受け、その瞳が金に輝く。

「さあ」

カナンに促されジンと呼ばれた青年は暖かな部屋へと入った。
書庫の片隅にあるカナンの部屋には小さいながらも、簡単な炊事
場と彼の寝台、5人ほどが腰掛けられる椅子があつた。

棚には色とりどりの小瓶や小箱が並べられていたが整理しつくさ
れており狭さを感じさせない。

部屋の中央に置かれた机の上には湯気をたてるカップが二人分と
甘い匂いの焼き菓子に乗っている。

いつもの席に着いた青年は冷えてしまった両手を暖めるように、
カップを包み込んだ。薄紅色の液体からは鼻腔を満たす花の香りが
した。

青年の名はジルフォード・アリオス。

アリオス王の弟にあたる。

名を名乗らなくともこの国では姿を見れば彼が何者なのかなど簡
単に想像がついた。

ジルフォードは昔から伝わる寝物語にでてくる魔物の名前だ。

名を呼ぶことは、魔物だと言っているのと等しく誰もがその名を
口にすることを畏れている。

ジルフォードと呼んでくれるのは兄である国王と義姉である王妃

と肝の据わった数名の家臣だけだ。

ジンと親しみをこめて呼んでくれるのはカナンぐらいのものだ。

ジルフォードは前国王と王妃の子どもでありながら王座を許されなかった王子だ。

国王と側室の仲を怨んだ王妃が呪いをかけ生んだ子どもだとも言われている。

その証拠のようにアリオス王族特有の銀髪を持たず、何者の浸食をも赦さないような白髪をしている。

さらに人々を慄かせたのがその瞳だ。

その瞳は特定の色を持たず、角度によって色を変える。

その恐怖と侮蔑を込めて人々は彼を 色なし と呼んだ。

ジルフォードは人々と関わり合いを持つことを避け、ほとんどの時間をこの書庫で過ごす。

カナンは幼少の頃から知り合いで、唯一心を許す人物だ。

傍から見れば、二人の間には会話らしい会話は無くうち溶け合っているようには見えないが、カナンにはジルフォードの心情は手に取るように分かった。

テーブルに乗っている焼き菓子はどれもジルフォードの好むものだ。

めったに表情らしいものを出さず、ほとんど人前で食事らしい食事をしない彼の好みを知っているのはカナンだけだ。

ジルフォードがお茶を飲み干すのを見計らって、カナンは静かにカップを置いた。

「ジン様」

ジルフォードは名前を呼んだ相手を見つめた。

正面から見れば彼の瞳は紫色になる。人々が魔物と恐れる瞳も力

ナンはしっかり受け止める。

「ご結婚なされるようですね。おめでとうございます」

その表情に浮ぶのは本物の贅辞のようだ。

孫を見るような穏やかな顔でカナンは告げた。

「そうらしいね。兄上が言っていたよ」

ジルフォードは淡々とまるで他人事のように応えた。

今朝、国王の執務室に呼ばれその事実が伝えられた時も同じような反応の仕方で国王も王妃も苦笑せざるをえなかった。

もともと政略結婚であることは目に見えているが、ここまで無関心であるのはどうだろうか。

ジルフォードは相手の名前を聞き出すことさえしなかった。聞く必要は無いとさえ思っていた。

ジルフォードは二つ目の焼き菓子に手を出し、カナンもそれ以上この話には触れなかった。

目の前の青年が何事にも無関心を通すのはいつもの事だ。時には自分の生死にすら関心を持っていないのではないかと思われる。

「もう一杯いかがですか？」

そういうと空になったカップが差し出される。

どうやら今日のお茶は気に入られたようだ。や

はり最後にチコの花びらを混ぜたのは成功だった。

栄養価が増すばかりでなく、体を温める効果があるのでこの時期には最適だ。

カナンは進んで栄養を摂ろうとしないジルフォードにせめてもと種類の薬草をお茶にブレンドしているのだ。

気に入らない場合でもジルフォードはカナンの気配りを汲み取ってか一杯目は飲み干してくれる。

二杯目を飲むのは気に入った証拠だ。

液体を注ぎ終わったカップをジルフォードのまえに置きながらカナンは告げる。

「明日には頼んでおいた本が届きますよ」

「そう」

興味のなさそうな声で告げられた言葉にほんのすこし嬉しさが混じっているのをカナンは知っていた。

カナンが長年をかけてもまだ読みきれない膨大な蔵書を青年はほとんど読み終わってしまったているのだ。

しかも内容を覚えてしまっている。調べ事をしていた時、その内容ならばと、本と頁数まで指摘してきた時には驚いたものだ。

しかし、その膨大な知識が生かされることも、ジルフォードが生かす気もないことをカナンは知っていた。

カナンがしてやれる事は、たまにお茶を入れて新たな本を与える事だけなのだ。

カナンはこの哀れな青年を助けてくれるような王女がやってくることを願った。

セイラ王女がアリオス王国の地を踏むのはあと一カ月後のことである。

第一章：はじまりに続く道4

休みの日でも玉の加工場は騒がしい。

朝から家でぐうたらしようものならば、奥さん方の雷が落ちるの大抵の男衆はここに集まってくる。

かしこまって玉の流通の話をしていたと思ったら、隣街の酒場の話に摩り替わり、誰のかみさんはおっかないだのと盛り上がり収集がつかなくなることもしばしばだ。

今日はまだ、今月に入ってやってきた哀れな盗賊の話で済んでいた。

「ダン」

セイラが呼びかければ話の輪の中心にいたダンが振り返る。

「よお。元気か？」

ダンはにかりと笑いながらセイラの頭をかき回す。

くちやくちやになる髪もいつもの事なので笑って頷いた。セイラが年頃の貴族の娘のように髪を結い上げない理由はこの行為のせいでもある。

七割は面倒くさいという理由なのだが、残りの三割は飾りをつけたまま頭を撫で回されると痛いのだ。

以前ハナにせがまれて髪を結い上げた姿のままこの加工場に来たとき、同じく大きな手で撫でられ、本気で禿げるかもと思った。

「昨日の大層な馬車は誰のだったんだい？」

「お頭、大変だったんだよう」

セイラが屋敷に帰ってから、ずっとやきもきしていたダン屋敷まで殴りこみに行こうとしていたというのだ。

止めてくれて本当に良かった。

もう少して『ジニスで使者が襲われる！』と早馬が出るところだった。

ジニスが有名になることは嬉しいのだが、悪評はいただけない。

「都からの使者だったよ」

「使者？　都の連中が今更何の用があるって言うんだ」

声を荒げるダンに引き寄せられるように加工場中に散らばっていた男衆が集まってきてセイラに挨拶ついでに菓子を渡す。

ここにすれば小さな店が出来そうなお菓子が入る。

「私の結婚が決まったんだって」

がやがやと騒がしかった室内がしんと静まった。

いつもは聞こえるはずの無い街の喧騒が微かに聞こえてくる。

周りを囲んだ男たちが目配せをし合い、言葉の真意を確かめる。

誰もダンに視線を向けない。

もう少し反応があるだろうと思っていたセイラは拍子抜けし、聞こえなかったのかと同じ言葉を繰り返した。

「誰とだい？」

ぴくりとも反応しないお頭に怯えながら先ほどの青年が尋ねた。

「アリオス国のシルフォード王子だって」

明るい声が不穏な空気を孕んだ部屋に思いのほか響き、男たちはすっと一歩分身を引いた。

「アリオス……？」

地を這うような声にあるものはすぐみあがり、あるものは次に行動すべく準備し始めた。

「そう」

「じるふぁーど？」

俯いていた顔を突如上げたダンに驚き、セイラも微かに身を引いた。

ひくりと痙攣を繰り返す口元と見開いた瞳が怖い。

「どこの馬の骨だ！」

怒号にびりりとガラス窓が音を立てた。

やれやれと数人の男たちがダンを椅子に押さえつけると、ダンはやをむく獣のように喉を鳴らした。

「え……」

一国の王子を馬の骨呼ばわりする彼にどう説明していいのだろう。セイラとて相手の情報は名前しか持っていない。

「アリオス？」

「アリオス！ 今すぐ玉の流通と加工取引の中止だ！」

「ええっ！」

予想だにしなかった展開にセイラは驚きの声を上げる。

いやいや、それは拙い。

何を焦るかって、ダンがやろうと思えば出来てしまうのだ。

それどころか鉾山に関することならば国王の命令でさえ突っぱねることができるのだ。

取引中止ぐらい本気でやりかねない。

セイラが制止しようとしたとき、顔を真っ赤にして息巻くダンの肩をしわくちやの手が叩いた。

「止めんか。馬鹿者」

ダンの半分ほどの身長しかない老人は先代の頭だ。

引退した今でもふらりと現れては茶をすすっていく。

セイラにとってダンが父親代わりならば、彼はおじいちゃんが代わりだ。

深い黒曜石のような黒を湛える瞳は鉾山の全てを知っている。セイラはその瞳を細められるのが好きだ。

冷静な人が出てきてくれてよかったとため息が漏れる。

「娘の門出だ。快く送り出してやろうじゃないか」

その言葉にダンは手を握り締め、ぐぬと唸った。

ダンとて解っているのだ。

国同士の契約に口を挟めぬことぐらい。けれど、今まで一度として顔も見に来ぬ国王の言いなりにさせるのは腸が煮えくり返りそう

なほど腹立たしい。

愛娘を他国の顔も見たことの無い連中の元に送るのも嫌だ。
鉾山の誰もが認めセイラを幸せにしてくれる男に嫁がせようと思
っていたのに。

「セイはジニスの娘だ。どこへ行っても変わりません」

「だがよ……」

それでも言い募るダンに老人はふと瞳を緩ませる。

ぐずる子どもによくやってやる表情だ。

大概の子どもはその瞳の色に惹かれるように涙を止める。

その色が突如、性質を変えた。

「アリオスの連中がセイを泣かすようなことがあれば、その時はア
リオスとの契約をすべて破棄じゃ！」

筋張った拳が突き上げられると、その意見に賛同した男たちも次
々に拳を上げ、咆哮する。

絶対泣き言なんて言わないもん……

まだ行く準備も整っていない内からアリオスでの生活規則その一
が出来てしまった。

後で奥さんたちに変なことをしないように注意して欲しいと言っ
ておこうと密かに決めた。

血気盛んな彼らもジニスの女性陣には頭が上がらないのだ。

「婚礼には他の誰にも負けねえ贈り物をしてやる」

「うん。楽しみにしてる」

ぽそりとまだ納得してないと感じられる声で呟かれ、セイラは満面の笑みを浮かべた。

ほろりと涙が浮ぶ場面だったが、昼食を届けに来たダンの奥さんに一喝され男たちはクモの子を散らすように帰っていった。

事情を聞いて彼女はきりりと目尻を上げた。

「まったく馬鹿お言いでないよ。セイがたった一人でしくしく泣くもんか。仲間を見つけて楽しくやるよ。あんたらが手を出しちゃ、余計厄介な事になりかねないじゃないか！ まったくうちの男共ときたらろくな事考えないんだから」

ダンはお奥さんの前で出来るだけ小さくなっていった。

老人はダンが捕まっているのをこれ幸いと早々に逃げ出した後だ。

「心配なのは分かるよ。可愛い娘は嫁にやりたくないもんさ。けど、この子が人一倍強いのはあんたがよく知っているじゃないか」

気風のいいダンの奥さんは怒ると怖いが慰め方もうまいのだ。

縮こまっていたダンも「おう」と顔を上げた。

彼女はセイラの傍に来るとそっと背を押した。

「行くんだらう？」

「うん」

加工場を抜け、山を登っていけば、街全体を見渡せる場所に出る。少し開けたその場所には小さな盛り上がりがあり、その周りには

白い花が群生していた。

まるでセイラが訪れるのを知っていたかのように一番美しい状態を保つ花に笑みを向けた。

「母様」

土の下に眠るのはセイラの母だ。

彼女の墓を飾るために幼いセイラは懸命に彼女の一番好きだった花を植えたのだ。

誰よりも強いと思っていた母はあまりにあっけなく最期を迎えた。病魔が巣くつているとは思えぬほど毎日豪快に笑う人だった。今でもひょっこりと現れるのではないかと思うほどだ。

「セイは結婚するみたい」

セイラは墓の前に座り、まるで其処に母がいるかのように話しかけた。

「しかもアリオスの王子とだよ」

すごいでしょとセイラは笑った。

アリオスの話はなぜか母がよくしてくれたのだ。

ほとんどが雪の話だったけれど。

嬉々として語る母の言葉を聞きながら何時かアリオスの地を踏みたいなあと思然とした憧れはあった。

それが、まさかこんな方法で叶うなんて予想もしていなかった。

「行ってくるね」

その言葉に「いつてらっしゃい」と風が花を揺らし、「大丈夫」

と風に揺らめく髪が頬を撫でた。

「セイ」

「オーリイ」

振り向けば厳しい顔をした幼馴染が立っていた。

「行くのかよ」

拗ねたような声。

皺の入った眉間。

泣き出す前の子どものようにくしゃりと顔が歪む。

「うん」

せつかく半人前と認められたのに。

これから腕を磨いてジニスの職人だと胸を張れる様になったら…
…そう思っていたのに。

「セイが王子様の嫁さんかよ。似合わねーな」

「そうだよねえ。全然想像が出来ないよ」

オーリイは唇を噛み締めた。

「俺は、ジニス一番の職人になるからさ、セイはすんげえ嫁さんになれ！」

「それってどんなお嫁さんなの？」

「んん。それは、さあ。セイが考えるんだよ」

「何それ。んゝまあいいやすんげえ嫁さんね」

「お前がすんげえ嫁さんになったら、俺が大陸一の玉を贈ってやる！」

「それじゃあ、お互いに頑張らなきゃね」

「約束だからな！」

「うん。約束」

出された両手に手を重ね額をこつりとくつつけあう。

子ども同士のお呪い。

手のひらに伝わる熱が忘れるなど身体に刻む。

熱が離れていく瞬間、やっとセイラの胸の中に小さな痛みが生じた。

もうここに帰ってくることは無いのかもしれない。

ジニスの風景は目を瞑っていても鮮明に脳裏に浮ぶけれど、オリイの見るジニスを、ダンの見るジニスを、そして母がみるジニスをセイラは見ることは出来ないのだ。

もう少ししたら、イーサンの鮮やかな黄色の花は散り、果汁のたっぷり詰まった実がたわわに実る。

その光景は想像はつくのだけれど、違うのだろっ。そう思うと途端に寂しくなる。

「なっ何泣いているんだよ！」

オーリイの声につられて、ほろりと涙が転がる。
頬の上で踊り転がり花へと落ちる。

「私ね。ジニスが好きだよ」

「お、おう」

「オーリイも好き」

「……おう」

「ダンもみーんな。みんな好き」

「セイはきつとアリオスも好きって言うようになるだろうさ」

「そうかな？」

「そうだよ。もしも、どうしても嫌なら帰ってくればいいさ。ここ
の連中はさ、セイのためなら城にだって乗り込んでいくさ」

ダンを筆頭に城に攻めあがるジニスの面々が容易に脳裏に浮び、
セイラは噴出した。

「そうならないように祈っていて」

セイはオーリイの曖昧な頷きをわざと見ないふりをした。

第一章：はじまりに続く道5

隣国へ嫁ぐという話が決まった後にはほとんど拍子にことが進み、あつという間に出発の日となった。

都に呼ばれて父である国王に会うこともなく、いくばくかの使者がジニスを訪れ決まりきった文句を述べて頭を下げていった。

ソレに比べ街中の人々は賛辞と別れの悲しみをない交ぜにして盛大に送り出してくれた。

数人の使用人たちは、屋敷に残り、母の墓を守ると約束してくれた。

鉦山の長であるダンなど厳つい顔を涙でぐしゃぐしゃにしながら笑い「辛くなったら帰って来い」と馬が驚くような大声を上げた。

しめつぽいのは似合わないとはかりに鉦山の男たちは愛娘のようなセイラの旅出を歌を歌い、踊り、酒を飛び散らして彩った。

行商に來たほかの街の人が目を剥くほどだ。

なかなか終わらない騒ぎに堪忍袋の緒が切れた使者が何度も怒鳴り散らしたが、声の大きさを鉦山の男たちに敵うはずない。

ちなみにこの使者は、手紙を届けに來た使者ではない。

体は細く、少々長い前歯をむき出して甲高い声で話すものだからダンはネズミと呼んでいた。

ネズミと命名された使者は、彼らが聞く気がないと知ると、ふて腐れて自分の馬車に閉じこもってしまった。

朝一に出発のはずが、ジニスを出たのはもう日が傾きかけてからだ。

「ふふ、少し寂しくなりますわね」

馬車に向かい合わせで座ったハナはその様子を思い出して苦笑した。

窓の外は鉾山の面影は無く、田園が続く。
もはやセイラの生活圈はずっと後方に置き去りにしてきてしまっ
た。

「そうだね」

寂しいという思いは胸の奥をつんと突き刺し、小さな痛みをもた
らすけれど不安は感じなかった。
きつとたくさんの涙と笑顔が拭い去ってくれたのだろう。

窓の向こうに思いを馳せると、農具の後片付けを始めた人々が、
何事かと行列を見つめている。

こんな田舎には貴族が来ることさえ稀だというのに、国王の旗印
を先頭にずらりと行列が続くのだから驚くのも当然だ。

セイラでさえ、これでもかと装飾を施された馬車に目をむいたの
だから。

国王の旗印の後ろには、セイラの守護神である月の女神リーズの
旗が風にそよぐ。

細い三日月が闇を抱くその旗は、太陽の雫を受けどこか誇らしげ
だ。

同列に並んだジニスの旗印は笑う魔物が描かれている。

エスタニアではどんなに小さな町村でも守護神を掲げているが、
魔物を守護としているのはジニスだけだ。

その魔物がこの道行きは愉快だと笑っている。
それにダンの大きな笑顔が重なった。

「どんなに離れていても皆は家族だよ。寂しいけれど、大丈夫」

言い切ったセイラにハナも微笑を浮かべ頷いた。

「タナトスは良いところだといいですね」

「そうだね」

タナトスとはアリオス国の都のことだ。

自国の都すら知らない二人には他国の都など想像することもできない。

「どれくらいかかるの？」

まだ出発して数時間しか経っていない。

セイラは、もともとじつとしているのを好む性質ではない上に馬車など乗りなれていないのだ。

普段は着ない裾の長い服で動きを制限されている事もあるのだから。動けないと思うと余計に動きたくなる。

「……十日はかかりましてよ」

ハナはその様子にため息をついた。

鉾山の街ジニスとはエスタニア国の西にあり、国境にも近い。

しかし、都からほど離れていないにしろ、他国とは遠いものだ。都からだとも一月は優にかかる。

ハナの口にした十日も何もなくめいはいっぱい急げば可能だという数字であり、セイラをなんとか納得させる日数に過ぎない。

そういえば、出発前に地図を見ながら、ぶつとばせば2、3日で着くかなあだなんて怖ろしいことを言っていたような気がする。

もちろん、忙しいせいで幻聴が起こったのだと綺麗さっぱり流した。

「馬に乗りたい」

ほそりといった言葉はすぐに却下された。

エスタニアでは高貴な女性が馬に直接乗ることなどまずない。

所作が美しく、お淑やかで出過ぎないことが好しとされるのだ。

ジニスでは多少のお転婆も許されたが嫁ぎ先の道中ではまずかう。

このお転婆王女は裸馬をも見事に乗りこなした男に感嘆の息を洩らせたのだが。

「ああ、早く着かないかな」

茜色の空に眩きは静かに消えていった。

第一章：はじまりに続く道6

セイラがうんざりするほど馬車に揺られてジニスで木々がよくやく葉を染めようとする頃、タナトスでは冬の支度が整いつつあった。吹き付ける風は日増しに冷たくなり、防寒用の厚いコートを羽織った人々が足早に路地を駆けて行く。

そんな寒さとは無縁の部屋の中で二人の青年が対峙していた。

一人は書類に目を通し、一人は壁に身を預けて。

書類に目を通す青年の髪は銀に煌き、彼が手に嵌める指輪形の紋章は王家のもの。

ルーフア・アリオス。

アリオスの国王だ。

その青年に鋭い視線を向ける眼帯の男はジョゼ・アイベリー。

漆黒の衣装で包んだ均整の取れた体と腰に帯びた剣は彼が軍人である事を示し、真紅の腕章で、軍人の中でもかなり身分の高い事が知れる。

格好を見ずともアリオスで隻眼の軍人といえば誰もが尊敬と憧れの目を向ける。

月影の將軍にして、魔剣の持ち主。

名を聞いただけでも敵が身を凍らせると言われた男は、全身から不穏な空気を出していた。

そんな人物が目の前にいようとルーフアは、翠色の瞳を上げることは無い。

無言の攻防戦。

予想通り先に音上げたのはジョゼの方だった。

思い立ったら即行動。

腹に本音を隠したまま笑顔で貴族の間を渡るなんて芸当が出来ないジョゼが、その世界で王を演じきるルーフアに叶うわけがない。

「何でダメなんだよ」

不機嫌を隠そうともしない声がジョゼの口から零れ落ちる。
四方に鋭い棘のある声だ。
気の弱い者ならへたりこんでもおかしくはない。
きつと眼光だけで泡を食っていることだろう。

「どうしてもだ」

ルーファは刺さるような視線も一言でいなし、新たな書類に判を押す。

届けられる書類は後を絶たず、ジョゼが訪ねてきてから三回ほど新たに届けられた。

まったく困ったものだ。

エスタニアの王女を貰うことは驚くほど早く事が進んだ。
来春にと思っていたのだが、エスタニアはもう王女を送ってくるという。

それならば雪が降り積もる前に迎え入れる準備を終え、王女の護衛の選抜、各地の警備など方々のことをこなす必要があった。
全力でそっちにかかっていた付けが回ってきたのだ。

去年より夏の時期が少なかつたために北のほうでは思ったほどの収穫量が無かった。

南の商業ルートを確保しなければ。これはエスタニアとより親密になり航路が開拓されれば、少しはましになるだろう。

ローラ山脈付近の少数民族が小競り合いを起している。
頭をかかえなくなる問題は山とあった。

「何でケイトはよくて俺はダメなんだよ」

「立ち位置が違っただろう。ラルド殿が辺境の守りに当たっているのだから、お前はここを守れ」

次第に声が大きくなるジョゼに駄々をこねる子どものような苦笑が浮んだが、声は厳しいまま。

一番の理解者であり、ライバルでもある陽炎の將軍、ラルド・キースの名を出してもジョゼの不機嫌さに変わりはない。

「俺だってジニスのお嬢ちゃんを早く見たいんだよ」

隣国から嫁いでくる王女の出迎えに自分が選ばなかったことが気に食わないと怒鳴り込んできて早一時間。

せめてもの配慮に彼の隊から出迎えのものを選んだのに、それも気に食わないらしい。

名誉でもなく己の力を示したいわけでもなく、ただ嫁いでくる王女を早く見たいという理由だけで彼は憤っている。

ルーファも戦場を共にする男の性格をよく知っていた。

「ジョゼ・アイベリーという男は私の言葉など聞かぬ奴だと知っているからな」

その言葉から相手の意図を読み解いて、ジョゼはにやりと物騒な笑みを浮かべた。

ジョゼ・アイベリーは都の守護をしている。

その名文だけあればいい。

ジョゼ・アイベリーの名はただのお飾りではない。

その名を聞いただけで相手は二の足を踏んでしまう。

姿が見えなくともその畏怖だけで敵は竦みあがり、味方を鼓舞する。

ここは戦場ではない。

本当に姿が見えなくとも良いのだ。

名前だけ貸しておけば自身は何処へなりと行けと言う。

全てのものに愛されたかのような容姿をしながら、狸オヤジどもに一向に引けをとらない若き王の腹黒さがジョゼは嫌いではない。

「ダリアがお茶を用意するようだが、どうだ？」

気が済んだのか背を向けるジョゼに声をかけた。

ダリアとは王妃のことだ。

「お忙しい国王様の至福の時間を邪魔するほど野暮じゃないんでね」

ルーフアが愛妻家である事は周知の事実だ。

一日に一度は王妃が淹れたお茶を口にすることも。

国王夫婦の日課であるお茶会に居合わせた者は幸せになるなんて可笑しな噂もあるようだが……

確かにお茶も菓子も申し分ないのだが、終始花を飛ばす二人と同じ空間にいるのは少々うざつたいとジョゼは思う。

「いらん気遣いをするより、早く軍の編成案を出して欲しいのだがな。將軍？」

「気が向いたらな。どうせお前が考えているし」

ルーフアはジョゼが去った扉に向けてため息を吐いた。

確かに彼の頭の中には完璧な編成案が出来上がっていた。

第一章：はじまりに続く道7

冷気を含んだ風も調練で熱の籠った身体には心地よい。

全身に風を浴びていた少女が何かを嗅ぎつけたように目を開く。

そばかすの浮いた鼻をくすんと鳴らす。

少女の一步は軽く、自身が風かのように気がつけば崖の上だ。

其処から遙か彼方を見下ろせば、少女だけに見える砂埃。

あれは人の立てるものではない。馬が連れ立って走っているのだ。

「ユーリ。どうした？」

「キース將軍」

ユーリと呼ばれた少女の後ろには影のような漆黒の衣を着た男が現れた。

その色を着ることを許されるのは3人だけ。

月影軍の將軍であるジョゼ・アイベリ。

陽炎軍の將軍であるラルド・キース。そして彼の副官であるユーリだけだ。

ラルド・キースははっと目を引く美丈夫で落ち着き払った声には、今の今まで身体を酷使していた名残など微塵もない。

一本にひつつめた髪は風に乗り後方へと流れるが、身体を冷やす

汗は一粒とて頑固そうな眉を乗せた額には浮いていない。

流石は我らがキース將軍。

それに比べて自分はどうかだろう。

汗まみれどころか泥まみれだ。

果たして同じ色の服に見えるだろうか。

恐らくみえないだろう。同じ調練でこの違いよう。

兵士たちも息も荒く座り込むものもいる。將軍は特別だ。

それが誇らしいような悔しいような複雑な心境を抱き、ユーリは口元を歪める。

「ユーリ？」

覗きこまれてやっと我に返った。

顔が近すぎるのと報告を怠った自責で、ユーリの顔色が赤に青にとめまぐるしく変化する。

もう少し離れてください！

いくらキースが地獄耳でも心の声まで聞こえるはずがない。

ユーリの背後は崖だ。下がることは出来ない。

仕方なく、キースに背を向ける。

「ええっと、あそこです！ 何か来たもので気になりましたが、どうやらマーゼムの兵のようです」

「導師の？」

キースは目を細めたが、点にしか見えないものが僅かに動いているのしか見えない。

マーゼムはマルスの教えを広める導師たちであり、アリオス王家における儀式や祭りの一切を請け負っている。

マーゼムを守る独自の兵たちは月影にも陽炎にも所属はしていない。

そのため彼らの鎧は銀ではなく赤銅色をしている。

キースには色の違いさえ見えないが、『風走り』とも呼ばれるユーリの能力には全幅の信頼を置いている。

ユーリの目はどんなに遠くの情報もいち早く見極めることが出来るのだ。

「王女様を迎える準備に九重の城へ行くのでしょうか。いよいよなんですねぇ」

王女を迎えることがはたして良いことになるのか。
暮れ行く空にいくつものため息が重なった。

第一章：はじまりに続く道 8

セイラ一行は、やっとエスタニア最後の街を出た。
もう一生分の馬車に乗ったと思うほどだ。

一行の歩みはほんの少し予定より遅れていた。
慣れぬ道であったこともあるが、大部分はセイラにある。

川を見つければ入り、森があれば誘われるままに入り込む。

その度に、行列は歩みを止め、使者から王女らしからぬと説教が始まるのだ。

その説教がまた長い。

それさえ無ければ、予定通り着いたのではないかと浮んだ疑問は誰の口からも出なかった。

ここで、また説教時間を延ばすほど愚かではなかった。

もう少しで国境を越えるというその時、馬車がかくを勢いをつけて止まった。

今までに無い乱暴な扱いでセイラもハナも額を打ち付ける羽目になった。

「なっ何事ですか？」

少々痛む額を押さえ外を窺おうとするハナを押し止め、セイラは立てた人差し指を口元に当てた。

その意味を正確に理解してハナも耳を澄ます。

荒々しい蹄の音。

叫び声。

逃げ惑う足音。

良くない事態が起こったことは瞬時に分かった。

必要なものは常に手元に置くようになったのはセイラの母のおかげかもしれない。

ジニスに腰を落ち着ける前は、決まった定住場所を待たなかったという母は常に持ち運び出来るように必要なものは一袋にまとめていた。

それに習って作っていた荷物とハナの手を取り車外へと飛び出した。

従者のいなくなった馬車から素早く馬の手綱を切り離し、背中に飛び乗った。

後ろにハナを乗せて走り出が、皆が散り散りに逃げ惑ってまとめることが出来ない。

見覚えのある顔に気づき、走り寄る。

地面に転がっていたのはこっそりと心の中でネズミと名づけた使者だった。

彼は蹄の音に怯えたが、乗っているのがセイラだと気づくと高く叫んだ。

「お、王女！ はっ早く行きなさい！ 次の街にはアリオスの兵士たちが迎えに来ているはずです」

そこまで行けば助かると彼の瞳は告げていた。

野蠻だ武力だけだと罵られようとアリオスの軍事力はどの国よりも優れている。

こんな賊などすぐさま蹴散らかしてくれるはずだ。

震える指先は行くべき方向をしかと指し示していた。

「だけど」

此処に残された彼らはどうなるのだ。

エスタニアがつけた護衛たちも奮闘しているが、どうも押され気

味に見える。

きつとネズミや連れてこられた侍女たちは裸馬に乗るなんて出来ないだろう。

かといって馬車に乗って逃げ切れとは思えない。

「何をしているのです！ 早く行きなさい。貴女が無事ならばどうとでもなるのです！」

ただの口やかましいお目付け役。

そう思っていた男は確かに使者だった。エスタニアのために何をすべきが一番分かっていたのは彼だったのだ。

「セイラ様！」

後ろを見やっていたハナが叫んだ。

刀を振り上げた男たちが乗っている馬がぐんぐんと近づいてくる。それを見て、セイラは馬の首を叩く。

「行つて！」

男たちの狙いは自分だ。

盗賊に見せかけて彼らは、宝物を乗せた馬車には目もくれず此方を目指している。

きっと自分がこの場を離れたほうが仲間は無事に違いない。

馬はぐんぐんと速度を上げた。

「……何か変だ」

「なっなにが、ですか？」

馬に乗りなれていないハナは長いこと揺さぶられフラフラになりながら尋ねる。

頭の中も視線の先もぐにやりと歪んでいくようだったが、セイラの腰に回した腕緩むことが無かったのは、もし相手が弓でも使ってきたら盾ぐらいにはなれると考えての事だ。

「追いついてこない」

「おっ追いつかれては困ります！」

信じられない答えに舌を噛みそうになったが、セイラの声は真剣そのものでふざけたところなどカケラもない。

「目的は何なのかな？」

最初は本気で走らせていた。

けれど、次の街までどれほど距離があるのかセイラには分からない。い。

脅威が後ろに迫っている輩ばかりとは限らない今、全速力で走らせ続けて途中で馬が使い物にならなくなるのは非常に困るのだ。

余力を残しつつ、掴まらない速さを見極めなければならない。

それなのに此方が僅かに速度を緩めても、チャンスとばかりに迫っては来ないのだ。

一定の距離を保ちつつ追い立てる。

それが意味するのは？

それに襲おうと思えば、もっとやりやすい場所があったはずなのだ。

襲われたのはまるで逃げてくれと言わんばかりの見通しの良い場所。所で国境のすぐ近く。

前方には森が見えてきた。

木々の間にひっそりと隠れてしまえば見つからないかもしれない。
馬を放すと木々の葉に隠れ、息を押し殺す。

二人とも坑道でのかくれんぼで息を殺すのは慣れたものだ。

掘り起こされる前、何万年もの眠りについた鉱石の如く動きを止めていた。視線の下を男たちが通っていく。

「行ったか？」

「そのようだな」

男たちが頭に体に巻きつけていたボロ布を剥ぎ取ると、鎧が見て取れた。

セイラを護衛してきたエスタニアの兵士たちのものとは明らかに違う。

胸には鳥の刻印が押されていた。

彼らが消えてしばらく経ってから二人はようとして動かなかった。

侵入者のいなくなった森がいつもの騒がしさを取り戻すとやっとセイラはハナの肩を叩いた。

「もう大丈夫」

「そうですか」

ハナの長いため息に傍を飛んでいた小鳥が驚いて何処かに逃げさっていった。

背中が一筋だけ青いその鳥はエスタニアでは見かけないものだ。
ジュードの森に入り込んでしまったのだろう。

タナトスへと続く街道はこの森を迂回するように北へと伸びてい

る。

森を過ぎれば街までは眼と鼻の先。

けれど、案内役も無く未知の森を抜ける自信はハナには無かった。

ああ、もうどうして。

自分はこのなにも役立たずなのだろう。

腕が立つわけでも案内が出来るわけでもない。

この森がどれほど続くかの答えも出せず、夜の森を渡る知識も無い。

「さあ、行こう」

落ち込むハナの横でセイラは明るくいった。

まるで遊びに行こうかというほどの軽やかさ。

「ジュードの森はそんなに深くないらしいよ。森に流れている川を辿っていくと街道に出ることが出来るって母様が言っていたもの」

毎夜聞かされていた母の冒険譚。

その話の舞台にいたと考えれば、気力が上がる。

「深くないといっても、もうすぐ夕暮れでしょう。日の暮れた森を歩き回るのはお勧めできませんわ」

暗闇は方向を狂わせ、獣たちを潜ませる。

一番怖いのは表立って街道を行けないもの達、つまり罪人たちと鉢合わせしてしまう事だ。

「じゃあ、洞穴で明るくなるのをまとう。きっと一日くらいアリオスの人たちも余分に待ってくれるでしょ」

川沿いに進めばいくつかの洞窟があることも母の話から分かっている。

洞窟の傍に自生している薬草を火にくべれば、匂いを嫌がって獣たちも寄り付かない。

母は、まるでセイラが此処を訪れる事を知っていたかのように必要な情報を与えてくれた。

「セイラ様って本当に前向きですわね」

悩んでいるのが馬鹿らしくなってしまう。

ハナは動きやすいように長いスカートを持ち上げた。

第一章：はじまりに続く道9

せせらぎを頼りに川を見つけたときには、日はすでに没しようとしていた。

その最後の振り絞るような光りも木々が邪魔をして、セイラたちの下へは届かない。

足元はどろどろで枝葉で傷つけた肌はひりりと痛む。

頭上の光りが消えるにしたがって、あまりを囲む空気も冷えてきた。

けれど、つないだ手は暖かく、セイラの掲げた光石のおかげで仄かな明るさがあった。

光石は、文字通り光るのだ。

闇に紛れてぽうと淡く光る。

エスタニアでもあまり知られていない貴重な石は鉾山の皆からの贈り物だった。

それぞれの固体によって色が違うのだが、セイラが貰ったものは暖かな黄色だ。

まるで月が落ちてきたような光景に恐怖も何時の間にか薄れてしまっ

闇への恐怖は消えてもあせりは募る一方だ。

おそらく方向はあっていると思う。

けれど、身を隠すことが出来そうな洞穴を見つけることが出来ない。

セイラは後ろを振り返った。

懸命についてくるハナは大丈夫だと微笑んだが疲労は目に見えて大きい。

セイラも着慣れない服のせいで一歩ごとに体が重くなる。

このまま倒れこんでしまおうか。
そんな思いが浮んだ時、前方でかざりと葉が揺れた。

「人……？」

小動物ならいい。

せめて肉食の獣ではないように。祈りをこめて見つめた先をすつと横切ったのは人影だった。

それが人間だと断言することが出来なかったのは、その人影がほんのりと光っていたように見えたからだ。淡い淡い月の光のように。

「待って！」

「せつセイラ様？」

「ハナは此処にいて」

光石と荷物をハナに投げわたし、走り出す。

葉を掻き分ける音がする。

足元では水がはねる。

静かすぎる森の中で騒音とも呼べる音を纏って突き進むセイラとは対照的に前方からは全く音がしまう。

幻を見たのだろうか。

疲れのせいかもしれない。

未知の森のせいかもしれない。

だが、それは幻ではなかった。

人影はやはりあった。

ほんのり光ったままだ。

木々があけた隙間から差し込む月明かりが人影をそう見せていた。人影の髪は月明かりを邪魔しない白だと知れた。

肌もきつとぬけるように白いのだろう。

「ねえ」

呼びかけに答えはない。

「まって！」

瞬きをした刹那、人影は煙のように立ち消えた。

人影がたち消えた場所に来てみると、蔦草に覆われた場所があった。

覗き込んでみれば洞穴がある。

「セイラ様！」

半べそをかいたハナが追いついてきた。

「いきなり走り出すからどうしたのかと思いましたわ」

「ハナには見えなかった？」

「なっ何ですか」

「んっ……人がいた気がしたんだけどね」

「私には見えませんでしたわ」

怪訝な顔をするハナに向かって笑み一つ。
今見たものをうまく話す自身はなかった。

月が人の姿をとったようだと言えばハナは信じただろうか。

「ほら、今日の寢床を見つけたよ」

小さな入り口を入れて暫く這うと天井が高くなった。

セイラやハナならば十分に立つことができる。

すばまった入り口のおかげで冷たい風は入ってない。

そのくせ濁った匂いはなく、一晚過ごすには十分だった。

「よかったあ。ここなら大丈夫そうだよ」

途中で拾った枝葉に火を灯すと炎は円形の空間を浮かび上がらせた。

光りが岩肌を舐め、二人分の影が舞い躍る。

小さな悲鳴の後、ハナの動きは殊更早かった。

セイラの腕をひっぱり背後に隠したかと思うと威嚇する猫のように髪の毛をおったてる。

事態について行けないセイラのぽかんとした顔を背後に受けながら、唸るように光りの届かない空間へと話しかけた。

「誰です?」

二人の動きに煽られた炎が気まぐれで見せたのは、光沢を持った人の目だった。

それが嘘でないことを証明するように忍び笑いが聞こえてくる。

声は四方八方に反響し、わんわんと上から降ってくる。

「わしか? わしはジュードーじゃ」

眼が暗さに慣れてくると髭もじやの老人が浮かび上がる。

彼の体に纏わりついた服だったものは色を失い、絡まった髪も薄汚れた肌も岩肌に同化してしまったかのようだ。

「ジュード？ 森と同じ名前なんだね」

「そうさ。わしはこの森の守番さ。ジュードの妖精」

妖精？

何とも怪しい物言いだ。

奇怪な樹木が生い茂り人の出入りを拒む森にひっそりという守番だとすれば、その大地に樹木に同化したような姿は納得できたかもしれない。

けれど妖精となると別だ。

こんな老人が妖精だなんて、今まで培ってきたイメージがガラガラと音を立てて崩れてしまう。

ハナは半眼で老人を睨みつけた。

「おや、信じておらん？」

「当たり前ですわ。妖精なんて御伽噺の生き物ですもの。貴方が森に隠れている人間だと考えたほうが現実的でしょう？」

「ふん。神話の国から来たくせに、常世ならざるものを信じんか。昨今の若者は、まったくつまらんのう」

嘆かわしいとジュードと名乗る老人は深くため息を吐く。

天を仰ぐ仕草もどこか芝居めいていて、怪しさに拍車をかけるばかり。

ハナは更に距離をとった。

「なぜエスタニアから来たと？」

神話の国といえばエスタニアのことだ。

数多の神々に守られ、ササン大陸一の栄華を誇る国。

「なに、簡単なことよ。アリオスの住人はジュードーが嫌いなのさ。わざわざ入ってこない。それならお隣のエスタニアからおいでなすつたと考えるのが妥当だろう？」

単純明快とからりと笑う。

けれど二人の少女には何故アリオス人がジュードーを嫌うのかは分からない。

「ジュードーの森には闇人がいるのだという噂がまことしやかに流れているのさ。この国の連中ときたら即物主義なくせに夢幻や闇人、そんでもってマルスだけは信じているんだから。ほいほい、そんな怖い顔するんじゃないよ。お嬢さん。お前さんはワシが悪いもんじやないかと疑ってるみたいだが、お前さんたちだって十分に怪しいよ。日も暮れようって時間に娘二人で森をうろつくなんてね」

さすがにハナにも反論できない。

自分たちは怪しくないといい張ってみたところで証明できるものはなかった。

「私たち、日暮れまでにアリオスの最初の街まで行く予定だったけど、賊に襲われて逃げてきたところなんだ」

セイラは歩を進めると、ぺたりと腰を下ろした。隣を叩きハナにも座れと合図する。

どうやら本気でここで一夜を過ごすらしい。

妖精もといジュードを気にしながらもハナも腰を下ろした。

「賊？ 最近では見回りも強化されてほとんどいないはずじゃ。国境付近ともなれば重点的に力を注いでいるはずだかのう」

「けれど剣を振りかざして追いかけられましたわ。……同じ鎧を着てましたわね。確か鳥のような刻印が」

「コレの事か？」

ジュードは地面に指を這わし、楕円を描き、その楕円の右側に小さな三角を付け、楕円の下方に棒を二本付け足した。

「……ええ、まあ……似てなくもないような」

何となく鳥に見えないことも無い。

いや、やはり似ていない。けれど、絵心皆無な画家はふうむと難しい顔をしながら唸る。

「むう。ん……」

「何なのですか？」

まじめくさつて唸っているが、ハナには遊んでいるようにしか見えない。

半眼で睨み付けると、老人は今まで思い悩んでいたことなど嘘のようにからりと笑った。

「小難しいことは朝考えるのがいい！ 夜は食って寝るのが一番じゃ」

投げ出したとばかりに老人は細く長い腕で何かを押しやる仕草をした。

「そうだね。とりあえずご飯にしようか」

セイラたちも一日中馬車に揺られ、森の中を歩き回ったので、腹の虫はもはや鳴る気力さえないほど空いていたし、足は棒のようだ。反対する理由もなくハナはセイラの持ってきた荷物をまさぐった。

「晩飯ならいいものをやろう」

笑いを含んだ声と共に何かが降ってきた。

ハナがとつさに受け取るとそれはカラカラに乾いた何かの干物だった。

「あら蛇ですわね」

平然とした声に驚いたのはジュードの方だった。

甲高い悲鳴を期待していたのに、少女は平然と蛇の干物を返してきた。

「一晩場所を借りるのですから、こちらが晩御飯を提供しますわ」

いつ何が起こってもいいように、食料の備えだけはきちりとしている。

今回もとつさに引つつかんだ荷物の中には携帯用のパンに干し肉、干した果物、少量の調味料などがちゃんと入っていた。

ここに来るまでの間に集めた木の実やきのこを足せば、蛇の干物なんかよりずっとおいしいものを作れる自信があった。

「……むう。てつきり叫ぶもんだと思っていたんじゃないかな。おじょうちゃんたち、つまらんぞ」

「そんなこと言われても知りませんわよ」

劣悪な路地裏で孤児として育ったハナにとってみれば、蛇だろうがネズミだろうが貴重な食料だ。

下処理までして食べやすくしてあるだなんて結構なことではないか。

ジニス育ちのセイラにしても別段驚くものでもない。

ジニスの男たちは、捕まえてきた蛇をビンに押し込み、強い酒を注ぎつけておくと滋養強壯の薬になると信じて疑わない。

人が集まると蛇酒のお披露目会がすぐに行われる。

ジュードが望むような可愛らしい悲鳴など上げられるもんか。

ジュードの愚痴などほうっておき、ハナはさつさと調理に入った。木の実は大きな葉でくるんで火の中へ。しばらくすると殻のはじける音がした。

かつては鍋だったであろう変形しまくった入れ物をジュードから拝借し手早く切った材料を放り込めば途端に腹の虫が騒ぎ出すおいしそうな匂いが辺りを満たす。

実際、ぐうと音がした。

「おや、こいつは失礼。料理と言えるようなものは久しぶりなものだな」

少女たちの笑いが響く。

「待ち望んでもらえて光栄ですわ」

大きな葉に盛れば、立派なディナーだ。

「ジュードーはいつからここに？」

「さあて、ずいぶん前からだとしか言えんのう。そうさなあ、外にいた頃の王はジーク王だ」

ジーク王と言えばアリオスの先々代の王だ。

「じゃあ、三十年近くここで過ごしたのですか？……三十年。それならアリオスの王子のことなんて知りませんわよね」

三十年前といえば、現在の王ですら生まれていない頃だ。

「王子？ ジルフォード王子か」

「知っているのですか？」

ジュードーは長い爪で頬をかいた。

「まあ、年に何度かは森に迷い込むやつがいるからのう。そいつらから多少は外の情報を得ているがな。知っているってほどのこともないさ」

「そうですか」

残念そうなハナを尻目にセイラは、ジュードーへと料理を手渡す。

「ふむ。なぜ、王子のことが知りたいんだい？」

一瞬身体が震えるのを見咎められなかっただろうか。
相手が老人ということもあって、つい気を許してしまった。
セイラが王女だということは決して悟られてはいけない。
ハナは慎重に言葉を選びながら話した。

「最近、ジルフォード王子の存在を知ったのですわ。今まで、噂すら聞きませんでしたのに。だから……どうしてかと思っただけですわ」

「そうか。ワシが聞いたのは王妃が呪いをかけたとか」

「呪いですか」

嫌な想像がハナの脳裏を駆け巡る。

「馬鹿な話さ。娘っこ一人にそんな力があるもんか。ええい、辛気臭い話は止めだ。飯がまずくなる！」

言っやいなや、ジュードは手を伸ばす。
殻のはじけた実を口に放り込めば熱と共に甘さが口に広がった。
さっとつくったスープの味も申し分ない。

「うむ。うまい」

「それは良かったですわ。もう少し、具があったほうがおいしいですけどね」

「なに、十分だわい」

「さつき、闇人って言ってたけど何のこと？」

「んん？ なんと言うかのう。影みたいなものだ。森の中を時折うるつくが、悪さなんてしやしないよ。わしはずっとここにいるが、一度もそんなことはなかったさ」

「ねえ、それって白い人影だったりする？」

ジュードは驚いたように目をまん丸にした。

「お嬢ちゃん。会ったのかい？」

「会ったというか、見かけたというか。追いかけてきたら此処に辿りついたんだよ」

「ほう。それはそれは。幸運なことだ」

ジュードが笑う。

その笑みに含むものはなく、ジュードは心底うれしそうだった。

第一章：はじまりに続く道10

いくら待ってみても王女一行が現れない。

エスタニアの護衛力を疑っているわけではないが、ちょっと国境付近まで見てこいと命令を受けた数人の兵士たちは馬車の残骸と震える使者たちの姿を発見した。

近づいてみると使者は訴えた「王女様はどこですか？ 貴方がたのいる街にむかったはずだ」と。

街に王女はやってこなかった。

来る途中でもそれらしき娘は見えていない。

「まさか森に？」

兵士の声は絶望で色づけされていた。

何の用意も無く、まだ幼さの残る娘だけであの森に？

森には獣も毒花も、そしてそこに身を隠した恐ろしい者もいるというのに。

搜索隊がすぐさま編成されたが、王女が姿を消して一夜が明けようとしていた。

「いいか。正午を区切りとする。それまでに見つけることが出来なければ、一度ここへ戻ってくるように」

5人編成で6隊を作った。

あまつたものは街道や、近くの町へと聞き込みへと言ったがめばしい証言を持つてくるものはいない。

ケイト・メイスンは小さなため息を押し殺した。

今は、ケイトが上官になる。醜態を曝すわけにはいかないのだ。初めて任された大きな任務は始まる前から大問題を抱えていた。

ケイトの仕事はアリオスの初めの街からタナトスまで王女を無事に送り届けることだ。

その王女が行方不明になっている。
半狂乱の使者が叫び、残された侍女たちは帰りたいと泣いている。
これから王女が逃げ込んだと思われる森の搜索を行うところだ。

「何か言いたいことがあるものは？」

その問いに手を上げたものが一人。
視線を向けたケイトの喉から可笑しな音が漏れる。

なっつんであの人が此処に！

もしかしてという危惧もあった。

でも、いくらなんでもという思いもあった。

自分の甘い思いはガラガラと積み木の城を壊すように音をたてて壊れていく。

精神が不調をきたす前に、あのぴんと伸びた手を見なかったことにしようか。

「聞いていなかったのですが、自分はどこの配属でありますか？」

わざと声音を代えてはいるが、そんなの現れたときからバレバレだ。

兵士たちからはクスクスと笑いが漏れる。
やはりなと。

「……私の隊と一緒に森へ」

「了解であります！」

元氣すぎるその声にケイトは、もはや隠すこともなく深くため息をついた。

自称ジュードの妖精に別れを告げてセイラとハナは道を急いだ。
た。

太陽のおかげで昨日よりずっと森の中は歩きやすい。小川沿いにいくようにという忠告を守って突き進む。

「無事に合流できるといいですね」

「そうだね。気長に待っていてくれるといいんだけどね」

一晩休んだので足取りも軽い。

これならば早々に街道までたどり着くことが出来そうだ。

鼻歌交じりの歩みもセイラが人差し指を立てたところで終わった。

「誰か来るね」

風の音に混じって何人もが木々を掻き分ける音がする。
重い足音が乱れずに近づいてくる。

「昨日の人たちでしょうか」

「分からないけど、誰かを探しているのは確かみたい」

音は複数の方向から迫ってくる。

何者も見落とすまいと言う意思が読み取れそうだ。森全体がぴりぴりとしていた。

二人は低木の茂みに身を隠し、息を殺す。

しばらくすると足音の主たちの姿が見えるようになった。

「見つかりませんね」

息を付いた青年がこちらを向いた。

セイラたちのいるほうをじっと見つめたが興味をなくしたように別の方を向いた。

その時、青年の着ている鎧が差し込む陽光を弾いた。

「あの紋章」

ハナが口を押さえたときには遅かった。

背後から太い腕が伸びてきて、子猫を摘むようにハナの首根っこを引っつかむ。

「ひっ」

悲鳴が最後まで迸る前に、太い腕は引っ込んだ。

セイラが手にした枝で思い切り打ち据えたのだ。

ハナを背後に隠しながら距離をとる。

手痛い返しをされた男は痛む箇所を擦りながら、さも面白いと言

ったように口笛を吹いた。

「もう。何をしているんですか。怖がってしまっているじゃないですか」

オレンジ色の髪 of 青年が慌てて飛んできた。

垂れ目気味の目がなんとも優しそうな印象を抱かせるが、青年もあの紋章のついた鎧を着ている。

警戒心は一向に解けない。

隙の無い臨戦態勢。

ケイトは困ったと眉を下げた。

「女の子二人では森の中は危険ですよ。供をつけますから早く出てください」

婦女子の安全を確保するのも月影軍の役目。

今は緊急事態だ。

供は一人でいいだろうか。

計算をするケイトを尻目に男はとつくりと二人の少女を見た。

亜麻色の髪 of 少女の体勢には隙が無い。

構えたのが枝ではなく細身の剣ならばさぞや様になったことだろう。

背後に守った少女に少しでも手を触れることは許さない。

ゆるぎない思いが瞳の中で弾けていた。

後ろの少女もただ恐怖に慄いているだけではなかった。

射抜くような視線は、ここにいる全てのものに注意深く注がれていた。

「なあ、お嬢ちゃんたち」

好奇の滲む男の声はどう良心的に聞いても何かをたくらんでいるように聞こえる。

その証拠に、少女たちはじりつと体勢を変える。

「ジョゼ將軍。やめなさいったら。貴方、もともと顔つきが怖いのですからね」

「言いたいこと言うなあ。お前」

肩を竦めるのは隻眼の男。

「……將軍？」

眩きを聞き取ってジョゼはにっと口の端をあげた。

「アリオス国、月影の将。ジョゼ・アイベリーと申します。そちらはエスタニア国のセイラ王女で間違いは無いでしょうか」

視線は庇われている少女へと向かう。

黒目黒髪。

今は多少汚れているが、本来はまるやかな象牙の肌。

エスタニア王家特有の容姿を持つ少女。

きりりと引き締まっていた表情が途端に歪む。

一瞬、安堵のために泣き出すのかと思ったが、眉は更に天を突き、

口元がひくりと痙攣する。

こりや、やばい。

ケイトよりも人生経験豊富なジョゼは、とっさにケイトを盾にした。

あんな顔をした女は8割がた叫ぶ。

残りの1割は怖ろしい形相のまま貝のように口を噤み、さらに残

りの1割は手が出る。

最後の1割は、運がよければ平手だろう。それならば甘んじて受けるべきだ。

ケイトが。

今回の責任者はケイトなのだから。

「どこに目をつけているんですの!」

幸運なことに8割の中におさまったようだ。

あまりに大きな声だったために、驚いた鳥が飛びたち、ケイトは目を白黒させている。

その場にいた大半の人間も声の大きさに驚き内容を把握できていない。

「セイラは私」

「はい」と伸ばされた手に兵士たちの眉がついと上がった。

視線は黒髪の少女から亜麻色の髪の少女へと移る。

たった今、將軍の腕を打ち据えた少女。

闘志満々で構えていた少女。

「こっちはハナだよ。言いたいことは分かる。ハナの方が王女様っぽいって言いたいんでしょ?」

ぎこちなく頷いたのは何人いただろう。

第一章：はじまりに続く道11

合流するはずだった街にたどり着くと宿の一室にたつぷりと湯が用意された。

汚れを綺麗さっぱり洗い流せば体がすつと軽くなったような感じがし、ハナに丁寧な髪を梳いてもらうと亜麻色の髪は輝きを取り戻す。未だにぶつぶつと文句を言い続けるハナに苦笑を一つ。

セイラは服や身体に泥がつくことなど全く構っていなかったのだから見事に泥だらけ。

とても王女様にはみえるはずもない。
彼らが間違えるのも無理も無い話だ。

「もうハナが王女になっちゃえばいいよ。ハナメリーはいないんだしさ」

エスタニアの王女の中で聖母の娘はそれぞれ季節の四女神の名を冠している。

第一王女が冬の女神ユノー、第二王女が夏の女神トゥーラ、第六王女が秋の女神のフープといった具合だ。

春の女神のハナメリーの名を冠するものだけが居ない。
丁度いいとばかりにセイラが笑う。

「ハナはハナメリーのハナだもん」

「何を言っているんですか」

ハナは腰のリボンを力を込めて絞った。小さなうめき声は聞こえないふりだ。

「ちゃんとした恰好をしていればセイラ様が王女だってすぐに分かりますわよ」

そうかなあとセイラは首を傾げた。

都から取り寄せたというドレスは、着慣れないせいかどうかにも浮いているような気がしてならないのだ。

サイズは合っている。セイラの苦手とするひらひらする裾や可愛いレースを覗けば、ぴったり過ぎるほどだ。

採寸なんてしていないはずなのに。

姿見の前で唸っていると来訪を告げるためにドアが二度鳴った。

慌てて脱ぎ捨てていた踵の高い靴に足をつ込むと、体勢が崩れてもバレないように椅子にしっかりと腰をかける。

無理やり好感度が高いと言われた微笑を貼り付けるのを見届けるとハナが扉へと急ぐ。顔の筋肉が硬直しそう。

現れたのが知った顔だと知ると途端に呆けた顔へと戻る。

その早業に顔を歪めたのは『ねずみ』改めニキ・オーデイスだ。

ニキの服装も変わっていた。

控えめな黒ながら全面に豎琴の意匠が織り込まれている。

豎琴は国王の守護神でもあるタナトの意匠。ジニスで見せたような子どもっぽい強情さは影を潜めていた。

「ご無事でなによりです。セイラ様。貴女がたの後ろを賊が追っていた時は肝が冷えましたよ」

「ニキも無事でよかったよ。他の人たちにも怪我はなかったのですよっ?」

「擦り傷きり傷の多少はありますが、命に関わるようなものではありません。損害は馬車だけ。荷物さえ無事です」

無然としたニキの表情に「おや」と首を傾げる。

彼の言い方では無事であったほうが問題があるといっているようではないか。

確かに命に比べれば荷物なんてと思わないでもないのだが、無事ならばそれに超したことは無い。

「何か問題でも？」

「どうも中途半端なような気がしてなりません。王女を浚うには手際が悪い。かといって荷物を強奪していくわけでもない。なんだかよく分からない連中ですね」

セイラ自身は行列が何を運んでいるのかは把握していないが、一国の王女として嫁ぐ身だ。

ドレスに装飾品にと高価なものは山ほどあるだろう。

それにちらつとでも心を動かされない賊がいるだろうか。

「国境で襲われたのがどうにも残念ですが、今回のことはアリオスにも責任があります。厳重に抗議をして事態の収集にはかつてもらいましょう」

ニキの薄い唇がつりあがる。対応に掛かる時間によってエスタニアをどれほど重視しているか量りますだなんて言うニキは賊よりよほど悪人ぼくみえるのは気のせいだろうか。

完全にアリオスに入ってから襲われていたら全責任をアリオスに被せただろう。

賊と兵士たちが同じ鎧を着けていたことは何となく言い出せないままになった。

ニキはこんな人物だったのだろうか。彼がまだ「ネズミ」だった頃は、

やたら説教臭くて怒りっぽくて、ほんの少し子どもっぽいところがあつたが、腹黒くは無かつたような気がする。

顔を見合すセイラとハナの前でニキは彼の出来る最高の笑みを浮かべた。

「さて、セイラ様」

猫なで声に鳥肌が立った。

ニキの怒鳴り声には免疫がついてしまっており、右から左へと綺麗に聞き流すことが出来るのだが、妙に甘い作り声は脅威の粘着力で耳に残る。

応えてはいけない。

返事をするということは聞く気があると取られてしまう。

だが、きらきらと光る瞳に負けてしまった。

「……なに？」

「倒れてください」

「……はい？」

「倒れてくださいと申し上げました。理由はなんでもよいですが、今回の賊の件で体調を崩したというのがよろしいでしょうねえ」

「すこぶる元気なんだけど」

汚れを落とし、疲れも流し、むしろ気分爽快です。

狭い馬車から抜け出して森を歩いたのも良かったようで変に凝っていた身体もほぐれました。

言う前に視線で牽制された。ああ、なんだか覚えのあるパターン

だ。

「ふりがかまいません」

「ふりといつても……」

馬車を抜け出せたと思ったら、今度はベッドに引きこもらなければいけないのか。

何故そんなことをと口を尖らせてもニキはセイラの不満などお構いなしだ。

「セイラ様。貴女はお遊びでアリオスへ嫁ぐわけではないのですよ。貴女はエスタニアの駒の一つなのです。どんな事態であろうが利用して、エスタニアに有利になるように働きかけるのが貴女の役目だと自覚していただきたい」

「……それがどうして倒れるって話になるの？」

「アリオス側の対応が楽しみでしょう？」

「ニキひどいぞ！ ハナも何か言ってやってよ」

無然とするセイラの横でハナはじつと前を見据え考え事をしていく。

「ハナ？」

「前から気にはなっていたのですが……ニキ殿がなぜ使者に選ばれたのです？ いえ、誰が選んだと言った方がいいでしょうか」

「誰って……国王とかじゃないの？」

「ええ、国の上層部ということは確かだと思うのですが、私先ほどのニキ殿の話を聞いていると、ある方の影が脳裏にチラついて仕方ありませんの」

四季の女神の話などしたからだろうか。

炎の女神を守護に持つ彼女は目をきつく瞑って頭を振ったぐらいでは脳裏から消えてはならない。

若干青くなつたハナの頬を見て、セイラの脳裏にも鮮やかに同じ姿が浮かび上がる。

セイラの場合、音声付だ。

倒れなさい。今すぐに。

「ニキは、ユリザねえさまの回し者なの！」

「回し者とはひどい言い方ですね」

非難めいた口調ながらもニキは満足げに頷いた。

ユリザ・リユーデリスク・トゥーラ・エスタニア。

彼女の威光は世界の隅々まで照らし出す。

片田舎で忘れ去られる運命だった王女の頭の中さえも。

「さあ、役にたってもらいますよ。セイラ様」

ニキの後ろにユリザがいるならば死ぬまでこきつかわれる。

セイラの頬からは血の気が引いた。

色を失くしたセイラに見事な病人っぷりですとニキが賞賛した。

「体調……不良ですか」

ハナから報告を受けたケイトの声には明らかな狼狽が混じっている。

当然のことだろう。

つい数時間前には、ジョゼを打ちすえ歓談をしていたのだから。

だがハナの曇った表情をみれば、何かあったのだろうと想像はできる。

いくら気丈に振舞っていても十代の少女が見知らぬ森で一晩過ごすのは神経をすり減らしたことだろう。

宿について緊張の糸が切れてしまったのかもしれない。

最初に与えられた王女という情報は頭の中で大きな割合を占めていて、実際に見たはずの光景を幻だったのではないかと思いつつある。

「しばらくお休みになりたいとのことなので、そつとしておいてくださいませ。すぐに出発ではないのでしょうか?」

「ええ、まあ」

本来なら直ぐにでも出発してしまいたいのだが、体調を崩させるわけには行かない。

明日の朝出発でもかまわないだろう。

「何かご入用なものはありますか?　すぐに準備しますが」

「今のところ、ありませんわ。必要なものがあつたら声をかけさせてもらいます」

ハナの頭の中ではセイラが呪詛のように呟いていた「馬、馬、うゝま」の聲が繰り返されていたが、聞き流す。

今、自由を与えたら当分の間、帰ってこないだろう。

「どうした?」

足音も騒がしく登場した隻眼の男にハナはおよそ友好的には見えない視線を送る。

まだ猫の子のように首根っこを掴まれたことを根に持っているのだ。

「セイラ様の体調が優れないようです」

「はあ?　ありえないだろう。あの嬢ちゃんだぞ?」

「どういう意味ですの!」

「言葉通りさ。ちょっとやそつとじゃ倒れたりするやつじゃないと思うがね」

その通り。

頷きかけた首を無理やり止める。

「ふん。大方、使者殿の入れ知恵ってどこか」

「ちつ違いますわよ。本当に体調が優れませんの！」

「まあ、いいさ。なあ、嬢ちゃんたちは王女様の婚約相手のことどれ位知っているんだ？」

「どのくらいって……」

ハナは唇を噛んだ。

考えるまでもない。全くだ。これっぽっちも知らない。

仮にも一国の王子の情報が全く掴めないなんて、そんなことありえるだろうか。

「そちらはセイラ王女のことをどれほどご存知なんですか？」

「ああ？ そうだな。ジニスで育てられた変わり者の王女だって聞いたぞ。母親の身分があまり高くないそうだが、色恋に淡泊なりユーデリスク王が手を出したと一時騒がしかった気がするがなあ。」

そう。その程度の噂もしらない。

それどころか存在さえ知らなかった。

得られた情報は名前だけ。

「私たちは何も知りませんわよ」

「そうか」

ハナの拗ねた声に帰って来た眩きは、あまりにも短くて、そこにどんな想いが含まれているかなど気づくことが出来なかった。

第一章：はじまりに続く道12

セイラを気遣った一行の歩みは、ゆっくりとしたもので行く先々でケイトは休憩をとってくれた。

申し訳ない気持ちもありながら、街の様子を知ることが出来て満足だ。

ニキから大人しくしているように強く言われたので、こっそりと馬車の窓の外を眺めれば、我知らず感嘆が零れ落ちる。

「すごいね」

「本当ですわね。舗装もまろやかで、馬車がちつとも揺れませんわ」

ジニスの街々の素朴な感じはジニスと似通ったところがある。それが心の底に潜む不安がゆっくりと溶かசிいった。

違うといえば全ての街道が石畳で舗装されていることだ。

その道幅も十分に広く、馬車は何台すれ違っても不自由を感じることはなかった。

街には市がたちたくさんの人が行きかっている。

市に並ぶものはジニスとは違うようで、よく見ようと身体を乗り出そうとしてハナに止められた。

もう少しで見ることができたのに。

ふくれつつらのセイラの耳に魔法の言葉を流し込む。

「ユリザさま」

途端に大人しくなるセイラがおかしくってハナはこころと笑う。今ならば「ニキ」も同威力を発揮することだろう。

「むう。ハナってばひどい！」

「使えるものは使っておきませんか。あら、お客さんですわ」

馬車から少しはなれたところに立っている少年がじつとこちらを見つめている。

4、5歳だろうか。

温かそうな外套にくるまれているが、むき出しの耳と頬は真っ赤だ。

手袋に包まれた手が2度3度と結んでは開いてを繰り返している。どこかそわそわとしていて、もどかしくて今にも地団駄を踏みかねない雰囲気だ。

何か用事があるのだろうか。少年の視線は一心にセイラに注がれている。

指先で手招けば、はっとした少年は辺りを見渡しつつ、一人頷くと一直線に走ってくる。それがリスのようで笑いを誘う。

大きな瞳が零れ落ちんばかりに見開かれてセイラを見上げる。

白く息が煙る。だが、少年の頬が赤い理由はそれだけではないのだろう。

潤んだ瞳は極度の緊張のせいかもしれない。

「どうしたの？」

「あの、あのね。おねーちゃんがお姫様？」

少々震えの混じる少年の質問の答えに窮した。

どう考えてみてもお姫様という柄ではないのだ。

お仕着せのドレスだって脱ぎ捨てたいぐらいなもの。

綺麗に整えてもらった顔だってもうすっかり化粧がおちているのではないかしら。

「お城にくるお姫様なんですか？」

「うん。まあ……そうだよ」

嫁ぐために来たのだから仕方がない。

しぶしぶ頷けば、途端に少年の瞳が曇る。

瞳の表面を覆っていた水気が瞬きによって集約され、目じりで美しい球体を作る。

お姫様が予想と違って泣くほどがっかりしたのだろうか。

次の言葉を待ったセイラに少年は意外なことを告げた。

「お城には魔物がいるの」

「……まもの？」

「そう。父ちゃんが言っていたの。お城には魔物がいるからお姫様が可哀想だって」

おや、それは初耳だ。

セイラとハナは顔を見合わせた。

自称妖精の居座る森に、存在を知られていない王子、魔物のすむ城。

秘密を抱え込んだアリオスは退屈する暇はないかもしれない。

セイラはにつこりと笑い、少年に赤い飴玉を差し出した。

魔物は何もアリオスの専売特許ではない。

エスタニアにだってたくさんいるのだ。

嵐を起こす泣き虫ティローウ。

人の多いところに現れる愉快なことが大好きなチューヴァ。

そしてジニスにだって魔物はいる。

「私の住んでいた街はジニスって言うのだけど、そこにも魔物はいたよ」

少年の瞳から堪え切れなかった涙が一粒転げ落ちた。

「ジニスは鉱山の街なんだけど、その魔物はせっかく採れた玉を食べてしまうんだ」

セイラは黄色の飴玉をがりりと噛み砕く。

「でもね、魔物と言ってもとても優しい生き物なんだ。今も一緒に暮らしてるよ」

「本当に？」

「うん。仲良くなる方法を知っていれば大丈夫。心配してくれたんだね。ありがとう」

少年は恥ずかしげに顔を伏せたが、またおずおずとセイラを見上げた。

「おねーちゃんは、お城の魔物と仲良くなれる？」

「きつとね」

「でも……前の王妃様はおかしくなっちゃったんだよ。ずーっとずっとお城に帰ってこないんだって」

どういふことかと続ける前に飛び上がった少年はやはりリスのよ

うにかけていった。

少しはなれた店の前で少年によく似た女性が呼んでいる。

きつと母親の目を盗んで、秘密を教えに来てくれたのだらう。

感謝の意を込めて手を振れば、少年は身体全体で応えてくれた。

その風景を置き去りにして、馬車はゆっくりと走り出す。

「なんだか物騒な話ですわ。元王妃さまって、ジルフォード王子の母君ではなかったかしら」

ハナはむすりと顔を顰めた。

やはり貧乏くじを引かされたのだという想いがむくむくと立ち上る。

「全くひどいものですわ！　こんなに物騒なところにセイラ様を放り込むなんて」

「なんとかなるよ」

「セイラ様は樂觀しすぎだと思えますわ」

ハナの文句を聞きながら、馬車はまた走り出す。

「もうすぐ着きますよ」

促されて窓の外を見やれば、前方に巨大な城壁が見えてきた。

街道から続く大門は漆黒でいかにも堅牢に見える。

決して落ちぬと謂われたタナトスの街。その中で剣の城と呼ばれるタナトス城が空を割って建っている。

「すごい」

我知らず零れ落ちるセイラたちの賞賛の言葉に、ケイトは気を良くした。

「門を閉ざせば、街全体が城砦です。今まで一度たりとも落ちたことはないんですよ」

街に溢れる人は皆が兵士だ。女も子どもも馬を駆り、剣を振るう。城壁の上に立つ兵士たちが、一斉に右の拳で胸を打つ。

「ようこそ。タナトスへ」

ケイトの言葉を合図に一向は門の中へと吸い込まれていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2800t/>

月神の祝祭～月神の娘と夜の王子～（改訂版）

2011年6月18日21時53分発行